

日本イェナプラン教育協会



ニュースレター Vol.4 2011. 2月号

発行元: 日本イェナプラン教育協会

編集: 山崎那菜

住所: 〒155-0033

東京都世田谷区代田6-3-22-202

TEL: 070-5559-0361 FAX: 03-3466-3439

HP: <http://www.japanjenaplan.org/>

mail: Info@japanjenaplan.org

立春はとっくに過ぎましたが、厳しく寒い日が続いていますね。
メーリングリストやニュースレターを通し、春告げ鳥のように、各地で行われている取りくみをお伝えしていきますので、「こんな活動を企画している、行った」などの情報や、みなさまの声をお聞かせ下さい。
一緒に『一人ひとりを尊重しながら、自律と共生を学ぶ』場を育てて行きましょう！

第4回

あなたの人生を変えた言葉、ありませんか

協会代表 リヒテルズ直子

大人にとっては「何気なく」いっただけの言葉、多分、次の瞬間には覚えてさえいない言葉が、それを言われた子どもにとってはとても大きな意味を持っている、ということが良くあります。大人にとってもそういう事がたまにあります、子どもの場合には、もっともっと大きな影響力を持つことが多いのです。その子の人生を変えてしまうほどに、...

ちょっとここで一呼吸をして、できたら、目でもつぶってみて、あなたのこれまでの人生に大きな影響を与えた人や言葉のことを考えてみませんか？

何か、その言葉を言われたために、ずっと心に引っかかったままで、トラウマのようになってしまい、抜けない言葉はありませんか。

私のある友人は、結婚が決まって結納が行われた日、夫になる相手の方とご両親と仲人の方が家に来られ、お母さんに言われるままに、お茶をいれて出したそうです。けれども皆が帰宅された後にお母さんから

「お前にお茶の入れ方をちゃんと教えておけばよかったねえ、...」

とさりと言われ、それ以来、20年以上経た今になっても、「私はお茶の淹れ方を知らない、私のお茶は美味しくない」という思い込みに捉えられたままで、来客にお茶を淹れるたびに、心の何処かで不安な気持ちになる、とっていました。

もう一人の別の友人は、お母さんが、長いことお姑さんとの確執の中で苦勞をしていて、家の中がいつも暗かったので、自分だけはニコニコ明るくしていようと子ども心に思っていたのですが、ある時、機嫌の悪かったお母さんから

「あんたは、何があっても、ヘラヘラして、ちっとも真剣に取り組まない」

と言われてしまいました。以来、長いこと、自分は

「真剣に何かに取り組むことができないんだ」という思いからいつまでも逃れることができなかった、といっています。

また、これは40歳半ばのある男性の話ですが、ご両親の都合で海外を転々として暮らし、帰国子女として日本に帰ってきたという経験のある人で、

「うちの母親に、あなたは帰国子女だから国語の勉強が遅れている。あなたの日本語は他の人より遅れているから、文章を書くことが大事な仕事にはつかないほうが良い」

と言われ、「そのトラウマから今も逃れられないんですよ」と言っていました。

ここにあげた人たちが言われた言葉を吐いた人たちは、決して、愛情がなかったわけではないと思います。言った相手である子ども達が、そんなに傷ついたり、深いトラウマを持つことになるうとは想像もしていなかったことと思います。また、逆に、言われた方も、自分が好きなお父さんやお母さん、もしかすると先生だったからこそ、その言葉が「ズシリ」と重くのしかかったのではないのかな、とさえ思います。

それに反して、人生の跳躍台を作ってくれるほどに、人生を切り拓いてくれた言葉というものもありますね。あの時、あの人が言った、あの一言が、...、というやつです。私にも、私の人生航海の舵を大きく切り替えてくれるような、そして、辛い時や苦しい時に、その一言を思い出すだけで、「もう少し頑張ってみよう」と思える言葉があります。一生大切に心にしまっておける言葉たちです。



みなさんの心のなかにもきっとそういう言葉があるはず
です。そして、これまた、言った本人の方は、多分、覚
えていないことのほうが多いのではないかと、思います。
覚えていないくらいに「何気なく」さらりと言われたから、
真実味があり、一生抱えて生きて行けるのかもしれない



Photo:ヒテルズ直子

親、教員、としては、「さて、困ったな、、、自分では
意識していないところで、子どもの心をこんなに傷つけ
たり、子どもの人生をこんなに壊してしまうのだつた
ら、、、」と思われるかもしれません。たしかに、たとえ
トラウマを生むような言葉でも、中には、それがあつた
から、そのトラウマをはねのけようと頑張ったし、そのお
かげで成長した、と言えるものもあるでしょう。一概に、
どれもこれも悪いことばかりとは言えないかもしれませ
ん。ただ、親や教員という、他人を育てる立場にある
人は、やはり、自分が何気なく吐いた言葉が、その子
どもの人生にとってとても大きな影響をおよぼすもの
になることがある、ということは、やはり自覚しておいたほ
うがいいと思うのです。それが、<親>というものの責
任でしょうし、<教員>という専門家の役割というもの
でしょう。

そこで、うっかり、思ったママをすぐに言葉にしてしま
う私自身も含めて、「教訓」。

誰に対しても、できるだけネガティブな言葉がけはし
ないようにしましょう。できるだけ、ポジティブな言葉が
けをしましょう。それだけ気遣っていたら大丈夫なのは
、、、、?と思います。なぜなら、「考え込んだり」「作
為的」に発する言葉は、ホンモノではないからです。よ
きにせよ、悪しきにせよ、ホンモノでない言葉は、トラウ
マになったり人生を変えたりはしません。人を変えてし
まうのは、その瞬間に、あるがままで発せられるホンモ
ノの言葉です。

だから、「ネガティブ」な言葉を発しそうになったら、
ちょっと一呼吸して、とどまったほうがいいですね。私も、
他人のことは言えません。どこで、どれだけ人を傷つけ
てきたか、穴があつたら入りたい気持ちです。自分の
子ども達が小さかった頃にも、いったいどれだけきつい
言葉を投げつけてきたらうな、と悔やんでも悔やみき
れません。子どもが小さければ小さいほど、親の「責任
感」が裏目に出て、権威的に「あれもダメ、これもダメ」
と言ってしまいますよね。

子ども達と交わる機会のある皆さん、サークル対
話でも、ブロックアワーの学習指導の時にも、子ども
たちと一緒に遊んでいるときにも、どうか、どの
子どもに対しても、ネガティブな言葉がけはできるだ
け少なく、そして、ポジティブな言葉がけをできるだ
けたくさんしてください。そうしたら、きっと、クラスが
明るくなり、子どもと子どもの間でもポジティブな言
言葉がけをしあうような雰囲気生まれるはずですよ。
それが、子どもの人格を「尊重する」ということなの
です。自分の人としての有り様を、あるがままに認め
られ、尊重された子どもは、やがて、他の子どもに
対しても、そういうふうに接することのできる人間に
なります。

「音痴だなあ」と言われるより「(唄を歌うのは苦手の
ようだけど)リズム感がいいね」と言われたほうがい
い、「(作文は下手かもしれないけど)君の詩はとて
もいいね」と言われたほうがいい、「(下手くそな文章
や、誤字脱字があつても)すごくいい目の付け所だ
ね」と言われたほうが次の課題への意欲がわく、「お
調子者だな」と言われるより「君がいるとクラスの雰
囲気が明るくなるね」と言われたほうがいい、、、

どんな子にも、なにか褒めてあげられる良さはある
ものです。そして、それがどんなにささいな事でも、
人から褒められることで、自分の自信になり、自分
を知るきっかけとなり、自分の中から良さを引き出
そうという気持ちを生むものになるのです。

子どもが何か、素敵なことを言ったりしたら、
どんどん「褒めて」ください。お世辞ではなく、心か
ら、、、

だって、そうではないですか、、、大人の私たち
だって、「けなされる」のはとても嫌。「褒めて」もら
うと、その日一日が楽しくなり、明日はまたもつと何か
をやるゾーって、そんな気持ちになるじゃあないで
すか。



Photo:ヒテルズ直子

ある若い社員ばかりの会社で研修をしたことがあり
ます。学校にいた頃、あまり出来る生徒ではなく、
ちょっと拗ねていた子たちだった社員です。家庭で
も親からよくぶたれた、殴られた、叱られた、とい
う社員たちでした。そういう社員たちとサークル対話
して、まずはじめに、

「隣にいる人が、会社にとってどんなに良い面を持っているかを考えながら他人紹介をしてみてください」

と言って、短いコメントを言ってもらいながら、10分ほど一巡しました。そうしたら、わずか10分で、場の雰囲気が和み、涙ぐんでいる社員さえいました。

同じようなことを、高学歴のバリバリの社員ばかりのグループでやりました。そのグループには、課長だの部長だの、普段は、あまり気楽に話の出来ない上司も混じっていました。知らん顔をして

「私はみなさんのことをよく知らないのですが、自己紹介をしてもらいたいのですが、それではつまらないので、隣にすわっている人のことを紹介してくれませんか。



ただ、その人の『良い』ことについて話してください。それもお世辞ではなく、ほんとうに『良い』と思っていることについて」

そんなことをしてみたこともない人たちは、とても戸惑った様子でした。でも、一巡したら、みんな、とてもニコニコとリラックスしていたのです。特に、上司と言われる立場にいる人が、一番嬉しそうでした。肩肘張っていた緊張がとれたように見えました。そして、その後の数日間、そのグループの人達ととても和やかに過ごすことができました。

社会を和やかにしていきたい、そう思いませんか。そのための種を、みんなであちこちに撒いていきましょう。



翻訳記事シリーズ シリーズ1 協働ゲーム

(アナマイケ・ファンハルテン)

訳:リヒテルズ直子

第4回 アナマイケ・ファンハルテン
原著: Anne Mijke van Harten, Samen Spelen,
Mensenkinderen 10 Januari 2008

一緒に学ぶ(働く)

歩み方を教える

イエナプラン・スクールでは私たちは「歩み方」を教えます。つまり子どもたちはよく準備された環境の中で、自分たちがぜひ学びたいと思うものを見つけ出し、そうすることで自分が幸せになれるものを学ぶ自由と責任を持っています。学校にかかわっている人たちすべてと一緒に物事に取り組み、それには幼児グループの子どもたちも加わります。唯一のルールは、自分がやりたいと思うことをやってみたらいい、ということです。自分が今どこにいるかを知り、何か他のことをしたいときにはそれを他の人に知らせること。そのようにして、子どもたちは自分の心に従うことを学び、自分たちにとって重要なことがなんなのかを感じるようになってきました。その結果注目すべきこととして、グループリーダー(担任教員)がこんなことを書いています。
「普通特別支援の対象になるような子どもたちが、ここでは能動的に、自分から進んで何かをするようになるのです。こういう子どもたちが、何か難しいことなどで他の子どもと協力するようになるのです。」

どうしてなのでしょう。それぞれの子どもにとっての何かを見つけ出すことは、その時点でその子どものニーズや関心に適する、十分に挑戦的なものを与えることであり、子どもにとって先を急ぎ過ぎる課題を与えないことだからです。協働ゲームをすることが刺激され、



(c) Earthgames www.earthgames.nl

何かのために一緒になって忙しく仕事をするということが、グループの中にポジティブな流れを生み出すのです。子どもたちにとっては、はじめは慣れないこともあるでしょう。たとえばある男の子は「僕はそれをやりたいし、今までだってそれはやってよかったはず」。それが可能であるということを見て確かめたグループリーダーは子どもたちに、一緒に働くための時間や場などのゆとりを多く与えます。子どもたちをあまりに自由にさせるとコントロールが利かなくなるのではないかと、という心配は次第に少なくなっていきます。グループリーダーたちは、子どもたちが以前よりもずっと学ぶことに動機づけられ、自分たちで責任を持つようになっていくのに気付きます。これは、グループリーダーが、協働作業のためにもっと自由な時間を与えるための欠かせない条件なのです。

企画された仕事

ペーター・ペーターセンは、教育とは本当の学習が行われるための教育的な状況を生み出すことである、と言っています。4つの基本活動のうち、学校の中で最も多くの時間が費やされるのは仕事(学習)の時間です。

「仕事(学習)」は3つの形式で組織企画することができます:競争的、個別的、または、協働的。協働の学びはイェナプラン教育に適合的です。なぜそうなのかを理解するために、この記事の中で、私たちは、競争的、個別的、協働的な学習様式が、子どもたちの発達や行動にどんな影響を与えるものであるかを見てみたいと思います。

競争的で個人的

競争的な教育制度では、子どもたちの成績は、子どもたち同士の間での比較、つまり、他人より高いか低いかにいうように評価されるやり方で、決まります。勉強をうまくこなした子どもたちは、さらに追加的な課題をやっつけようということになりますし、うまくできなかった子どもたちは同じ課題をもっと繰り返すかそのクラスから離れたところで特別の練習問題に取り組まされたりします。子どもたちは、それぞれお互いに、だれがよくできて、だれがあまり良くできないかを知っています。多くの子どもたちにとって学校は競争の場です。子どもたちは、ベストになろうと頑張り、お互いにお互いを乗り越えようとします。競争的に組織された教育制度は、何を学ぶかということに顧みずに、ただ人に勝つことを目標にしてしまいます。子どもたちのとてもたくさんのエネルギーがベストになることのために費やされ、本当に何かを学ぶことのためには使われません。

教育が個別的に組織されている場合、子どもたちは、とりわけ自立的に、そして、一人で学びます。子どもたちは、自分の学習に忙しく自分自身の(学習)目標を達成するために忙しく学んでいます。こういう制度では、子どもたちは、何か一つの良い評価を得ることはできません。一生懸命勉強をするし、ベストも尽くします。こういう個別の環境の中では、子どもたちは、学習に関する限り、お互いの接触があまりありません。一人の子どもの学びは、他の子どもたちの学びとは関係なく独立しています。学習は、それぞれが自分のためにやるという雰囲気のものになります。

協働的:お互いに対立してではなく、お互いに一緒に

協働的に組織された学習シチュエーションの中では、子どもたちは、能動的で、建設的、また、学習材料を持って、互いに相互作用に忙しくしながら学びます。一緒に学び、お互いから学び合います。子どもたちは、お互いに、また、学習のための教材に積極的にかかわります。



(c) Earthgames www.earthgames.nl

子どもたちは、学んでいることについて一緒に話し、それによって、それが子どもたちにとってどんな意味を持つものであるかをよりよく理解します。グループリーダー(担任教員)から学ぶというだけでなく、お互いから学びます。だから、学ぶことがもっとたくさんあるのです。協働的な学習状況の中では、子どもたちは、お互いに依存しあうということについてポジティブになります。子どもたちは自分たちの個別の長所、グループに対する寄与、お互いの違い、全体に対する貢献といったことを経験します。子どもたちは自分の目標を他の子どもたちと一緒に達成することができることを学び、それによってお互いに強く結び付いていると感じます。お互いによく知りあい、お互いをよりよく理解し、尊重できるようになります。いろいろな研究が、協働する子どもたちは、伝統的で古典的な状況で育つ子どもたちに比べて、より良い自尊感情、自分自身の価値を発達させると言っています。

子どもたちは何かに属しているという感情を持ち、人から尊重され、自分でも価値のある存在であると感じることができます。また、自分の成功を他の子どもの成功とポジティブに結びつけて考えることができるようになります。子どもたちは、より良い成績を収めるようになることが明らかになっています。それは特に、これまで平均以下の成績を収めていたような子どもたちに強い傾向です。子どもたち同士の関係は改善され、異なる文化的背景を持つ子どもたちの関係も良くなります。ごく自然に、解決法を一緒に探したり、何かを共有したり、お互いに耳を傾けたり、一緒に仕事をしたり、互いに助け合ったり、創造的な考え方をするようになります。子どもたちは、自分たちだけで新しい知識を吸収し、情報を集め、その情報を処理できるようになります。このようにして、子どもたちは、思考力、社会性のスキル、協働やコミュニケーションのスキルを発達させることができるようになるのです。

競争から協働へ

学習を協働的なものにするためには、協働学習の時間を教育の中に設けることです。子どもたちを小さなグループに分けて、前もって枠組みを作っておいた協働の形式で学習課題を共通の目標として学べるように、教育環境を意図して作ること。学習を協働的に企画するには、授業枠組みを使って準備しておく必要があります。その際、4つの原則が守られなくてはなりません。それは、平等な参加、個別の責任、ポジティブな意味でのお互いへの依存、みんなと一緒にアクションにかかわること、です。

私の経験では、協働の遊びが協働学習の準備になると思います。なぜなら、子どもたちの発達においては、遊びが、枠組みのある学びに先立つものだからです。子どもたちが、一緒に遊ぶのではなく、お互い対立的に遊ぶという経験を持っている場合、私たちは、まず、子どもたちが、競争的な考え方をやめるようにさせてから、協働学習をするように指導していかなくてはなりません。これに対して、子どもたちが、すでに小さい時から、協働的な遊びをしていた場合、ごく自然に子どもたちは協働的な形で学習できるようになります。子どもたちに協働的な遊びをさせてみるとわかることですが、子どもたちは、驚くほどあっという間に競争的な態度から協働的な態度に変わることができます。

大人の場合には、つまり、これは教える立場にあるグループリーダーについても言えることなのですが、少し長くかかることがあります。それは、私たちが、大人として、すでに、全生涯にわたって競争的なものの見方をするように学んできているからなのです。ですから、子どもたちを協働的な学びに導いていくためには、まず何よりも、協働と競争についての自分自身の考え方や感じ方を変えなくてはなりません。私たちが、学校を訪れて協働ゲームのワークショップをやってみると、この変化を、子どもたちの方がグループリーダーたちよりもずっと早くやってのけます。協働ゲームの経験を持っている年長の子どもたちなどは、自分で進んで、どうしたら共同で学べるかを考え初めたりするようになります。そうすると、協働学習を企画して子どもたちに与えるというステップは、別に特別に大変なものではなくなるのです。なぜなら、協働して何かを行う、ということは、すでに、子どもたちにとって、安心してできる方法である、ということが明らかになっているからです。12才のウィレメインは協働ゲームを企画した生徒議会の子どもの一人でした。

「私は、ある男の子が、僕は急に負けるのが平気になったと言っているのを聞いたわ。なぜなら、いつも勝つ必要はないんだ、ということが分かったからだって。私、この子のいっていることいいことだな、と思ったの、平気でいられるっていいことだなんて。子どもたちみんなをほんの少し変えられることができたら。学校の中でずっと喧嘩が少なくなると思うな。休み時間になると喧嘩ばかりしていたのが、このごろは喧嘩が全然なくなった、なんていう風に」

学習を協働的なものとして企画することによって、学びは再び子どもたちのものになります。子どもたちは、自分たちのクオリティを発見し、将来の人生の中で、それを使うことができるようになります。グループリーダーは子どもたちが、みな、ありのままの自分での目撃し理解するようになることでしょ。そして子どもたちは、お互いにずっと思いやりを持つような協働的な雰囲気を生み出し、学校の中にポジティブな教育的な雰囲気が生まれるのです。

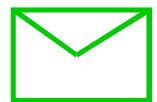


—リヒテルズ直子の 質問箱 —



保育士 Jさん
東京都

Q1: 朝の集まりなどで、輪に入りたがらない子どもがいる場合に教師(保育者)はどんな対応やほたらきかけをしていますか？



A:リヒテルズ直子より

輪を作ったのサークル対話は、何よりも、毎日同じ時間にやって習慣にすることが大切です。普通、サークル対話は、みんなの気持ちが集中するように、一旦集まったところで、3,4分のできる協働ゲームから始めます。小さい子どもたちだったら歌を歌ってもいいし、短いお話をしてもいいでしょうし、ぬいぐるみを使ってもいいかも。

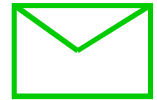
ただ、できるだけ毎日同じことの繰り返しにならないように。つまり、子ども達が、「あまたか」という気分にならないように。そのためには、季節の話題を取り入れる、その日の行事に関係のあることをする、子どもたちが喜ぶゲームを時々入れる、などの工夫が必要だと思います。

それから、サークルそのものに子ども達が嫌気を感じないようにすることも大切です。次回、サークル対話のルールについて書きたいと思っています。子ども達がサークルを嫌がらないためのルールです。それから、次回から、サークルなどで使える協働ゲームを毎回一つずつ紹介していきたいと思っています。少々お待ち下さい。ご質問ありがとうございました。



保育士 Jさん
東京都

Q2: 日中の活動で、外へ出て遊ぶか室内で遊ぶかを子どもが選べるようにしています。ただ、いつも室内で遊ぶことを選ぶ子どもには、たまには外へ出るように促しています。(外へ出て身体を動かすことも必要と考えているため)
子どもが選ぶことと教師(保育者)の意図のバランスをどこでとっていいか私自身がわからずにいます。
イエナの学校ではどのように考えていますか？



A:リヒテルズ直子より

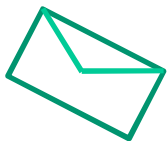
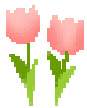
子どもが選べることは大切だと思います。でも、保育者が子どもにとって大切なことを考えるのも重要。そのバランスはいつもとても難しい部分であると思います。外に出たがらない子ども、なにか選択肢があっても一つか、二つのことに加わりたがらない子どもについては、それがどうしてなのか、原因を見出すことが先決ではないでしょうか。そして、子どもが嫌がっていることを、自分で、客観的に意識できるようなガイダンスができるのなら、最善ですね。その理由を探してみると、何か、子どもの方にはなく、環境の方に問題があることが分かってくるかもしれません。その問題を取り除くことができるのか、取り除いたほうがいいのか、取り除くことが他の子どもにどんな影響をあたえることになるのか、また、環境の問題が、ある子ども(たち)との人間関係であるのなら、保育者がそれを把握しておいて、折を見て、それを改善するようにすることも重要であると思います。

子どもが参加できないことが問題なのではなく、その原因を探ること、また、そういう状況から、保育者は、自分が担当している子ども達全員のことを考えた上で、何が最適なのかを考えるきっかけとする、ということが大事なのではないのでしょうか。

いずれにしても、子ども自身が望まないことを、無理強いする場所にならないようにしてください。そうすると、保育者と子どもとの信頼関係がなくなります。今は外に出たがらなくても、いずれ時間をかければ、自分から出られるようになる、そういう事が許容できるのなら、少しゆとりを持って待ってあげるようにしてください。

イエナプランでは、サークルで自発的に発言しない子どもには無理に発言させることはしません。また、ある学校の体育の時間に、二人くらいの男の子が参加できずにグズグズしていましたが、そういう子どもも、無理に参加させようとはしません。ただ、好きなところからオブザーバーとしてみんなの様子を見せていました。そのうち、他の子ども達がしていることに興味を持って、自分から進んで参加できるようになるのを、待っていました。

無理強いして参加させ、その他様々の面でも信頼関係が無くなってもいいのか、あるいは、その時のその子の気持ちを尊重して、信頼関係を優先するのか、長い意味では、後者のほうが、よい発達のベースになるはずですよ。



イエナプラン教育に関するご質問を募集しております。
下記のメールアドレスまで、お気軽にご連絡ください！
info@japanjenaplan.org



コラム

教室にある遊び

株式会社アソビジ(協会会員)
中川 綾

4年前、オランダの学校を何校か視察させて頂いた時、教室にボードゲームやカードゲームなどの遊び道具が当たり前のように置いてあることに驚いたのを思い出します。教室の中に、「遊び」の仕掛けがあるということは、とても重要な気がしました。

私が育った学校の教室にあったものと言えば、本や水槽や花……。ゲームは「学びを阻害するもの」として、置かれてはいませんでした。もちろん、子ども達が自分で持ってきて、それはそれで問題になったような気がします。(雨の日だけはトランプを持ってきてもいい、なんていうルールなんかもありましたよね。)しかし、最近では日本の教室もそうでもないようです。

私は、リヒテルズ直子さんから「協同ゲーム」を紹介して頂き、「これは今の日本の子ども達にとっても絶対にいいに違いない」と思い、実際にボードゲームを作ることになりました。調べてみると、日本にもすでに「協力ゲーム」としていくつも入ってきてはいたのですが、『競争しないものはつまらない』という理由で売れないのだと、ゲーム制作会社の方もおっしゃるくらいでした。ですので少々不安もあったのですが、ところがどっこい。実際にボードゲームを提供するようになって、学校の先生方に興味を持ってもらえることがよく分かりました。現在では、教室に置いてくださっている先生も、多くいらっしゃいます。

そこで、なぜ、この協同ゲームが、先生方にも受け入れられたのか、を私なりに考えてみました。

みんなで入り込めるストーリーがある

私が制作した「オニミチ」というボードゲームには、『眠っているオニを起さずに、5つの宝をとって家に帰ろう!』という簡単なストーリーがあります。このゲームの主人公はひとりですので、1つの駒を、参加者みんなで動かしていきます。ゲームをすすめていくうちに、必ず話し合いが必要になるのですが、参加者全員が「主人公」となって、物語を進めていけるので、喜びも失敗も、全員で共有できるところがミソです。今まで私たちが遊んできたすごろくのようなゲームは、ひとりひとりが競争をし、誰が1番早くゴールできるか、を楽しみましたが、全員でゴールを目指す楽しみをボードゲーム1つで感じることができるのです。



(c)株式会社アソビジ

ハードルが低い

また、運動が苦手な子がいても、年齢が違う子がいても、気軽に教室内で取り組むことができるのも利点です。例えば、サイコロで決まる運命は、「誰かのせいにはならない」わけです。そもそも、「みんなで」話して決めたルールで遊ぶわけですから。とは言え、もちろんケンカや言い合いになることはあります。それでもそれはそれ。自分の意見や思いを伝えていくことで、良くもなるし悪くもなる、ということを通じて学ぶことができる、ツールの1つでもあるのです。

自分たちでルールをつくる、という余白がある

この協同ゲームを制作して見てきてきたことは、子ども達にとって、「ルールを自由に変更することができる」ということが、より遊びにのめりこんでいきつかけとなる、ということです。

もちろん、「参加者全員が同意すれば」という条件つきではありますが、もともと決まっているルールを飛び越えてもいいよ、と最初から言われていると「どうしたらもっとおもしろくなるか」「どうしたらより難しくエキサイティングになるか」を考え始めます。そういえば私たちもおにごっこなどをいろんなルールで遊んでいましたよね。それと同じです。

そして、子ども達は、大人が思いもつかないようなルールを考え出すので、何度もびっくりさせられました。やはり子どもの発想は無限です。



(c)株式会社アソビジ

対話の効果

これらのようなツールときっかけがあることで、チームで目的を達成するためにどうすればよいか、を自然と考えるようになります。そして、ケンカや言い合いも越えて、「どうしたら“楽しく”“気持ちよく”みんなで目的を達成することができるか」を目指すようになります。対立があってはじめて次の段階に進めるんだ、ということを通じて学ぶことができるのも、「協同」するからこそ。特に私は、この協同ゲームは、妙に「イイ子」になって我慢をしたり、気を使い過ぎることが良いことだとは限らない、ということを感じることができると感じています。

「みんな違う」は当たり前なことなのにも関わらず、それをわざわざ言葉にして言わなければならない社会よりも、それを前提とした社会の中で自分はどう生きていくことができるのか。「遊び」を通じてそれらを学ぶ環境を、先生方が教室につくり始めていることを、心から嬉しく思います。

Jena-Cafe (イエナ カフェ) のすすめ!

千葉支部 山田順子

①カフェと聞いて何を連想なさいますか？

居心地の良い空間、美味しいcoffeeや紅茶、そしてSweetsもほしい！ですよね？でも何もなくてもカフェはできます、否！一つだけ欠くべからざるもの、それはお喋りです。

無縁社会という言葉、この頃耳にすることが多くなりました。

家族もいるし、友達もいる、でも孤独を感じる時ってありますよね。自分のことをわかって貰えなかったり、どうせ無理だろうからと本当の気持ちは伝えずに話を合わせてしまったり、自己嫌悪や絶望感に襲われたり、大事にしている思いを諦めそうになったり…

でもそれだからこそ、思いが通じた時って嬉しい！もしかしたら最高かも！「共感」するってこと。Feeling Shareと言う人もいます。

初めてリテルズさんのお話を聞いた時、それまでバラバラだった思いがス～ッと一つに焦点が合ったというか、爽快でした。

その直子さんの講演会で川崎さんに会った時も通じ合うものを感じました。そして始めたイエナ・カフェ。そこでもまた新しい出会いがありました、西巻さんや遠くから参加して下さった学生さん、それにtwitterの縁でカフェの会場を貸して頂いた浅井さん、本当に少しづつですが、確かに前に進んでいるような気がしています。

②カフェのようなもの…12年前から

1998年の5月に「こんな学校にしたい会」というお喋りの場を設けたのが、今振り返ってみればカフェの始まりです。市内のあちこちでPTAや平和活動をしている母親が集まって、月一度あ～だこ～だと話し合っ、元気になるって自分の持ち場に戻っていく、そんな場所でした。何度か浦安市の教育委員会に要望書を届けて話し合ったり、市長室でチャータースクールの学習会を2度、千葉県の教育委員会と話し合ったことも。そうした活動から教師の猥褻事件の「被害者親子を支える会」や「チャータースクール研究会」が生まれ、それが「NPOお～ぶんどあ」になり、フリースクールや不登校の子どもの居場所に。(現在閉校)もう一つ「公開討論会を開催する会」も生まれています。教育を変えるには政治にも関心を持たねば、市民が育たなくては！という思いからです。これまで19回の討論会を実施し、4月の市議選で20回目を迎えます。とにかく話し合っって楽しい、話し合う中で何か生まれる！と思っています。

これまで「おしゃべりカフェ」ちょっと気取って‘BeFree Cafe’と名前や開催日時を変えと、知恵を絞ってききましたが、Jena-Cafeに落ち着きそうです。名は体を表すって言います。目的がハッキリしているカフェだから、分かり易くて良いなと気に入っています。

③カフェの大変なことって？

人が来てくれるか…それが心配なんですよ。でも、この頃人集めをしようなんて思わなくなって、とっっても楽になりました。誰かを待ちながら、一人で本を読んでいたっていいし、二人ならゆっくりおしゃべりできるし、3人揃えば最高！という気分です。

これまでのカフェ2回は、どちらも10人くらい。初めての参加者がいて嬉しかったし、リピーターがいたことは更に嬉しいことでした。

ただ主催者側の私が個人的な事情で忙しく、お知らせが不十分なのが反省点です。負担を軽くするために、告知はMLを利用させて頂くことにしたいなあと。そのためにもカフェ参加の皆さんにイエナプラン教育協会のML会員になって頂かねば！！このことは毎回訴えていこうと思っています。そうすれば告知も楽に、ますます楽しいものになりそうです。

皆さんも、地元で始めてみませんか、イエナ・カフェ

第3回イエナ・カフェは「イエナプラン20の原則について」

2月19日(土)14時～16時 浦安市市民活動センター2F

問合せ:090-9678-7230 または chaochoco925@gmail.com(山田)



★リヒテルズ直子さんへの質問募集

イェナプラン教育やオランダについて、リヒテルズさんに直接たずねてみたいことはありませんか？
皆さまへの回答は、ニュースレター～リヒテルズ直子の質問箱～に毎月掲載いたします。
ご質問のある方は、件名に「ニュースレター質問箱」とお書きの上 info@japanjenaplan.org
までお送り下さい。

紙面の都合上、いただいたご質問はこちらでおまとめし、毎月1～2件ずつ掲載しますことをご了承下さい。

皆さまのご質問をお待ちしております。

★ニュースレターへのご意見ご感想をお待ちしております。

無事、第4号まで発行することができました。ありがとうございます！

より良いニュースレターの制作のためにも、みなさまのご意見ご感想をお聞かせください。

info@japanjenaplan.org

心よりお待ちしております。



★各支部のご案内

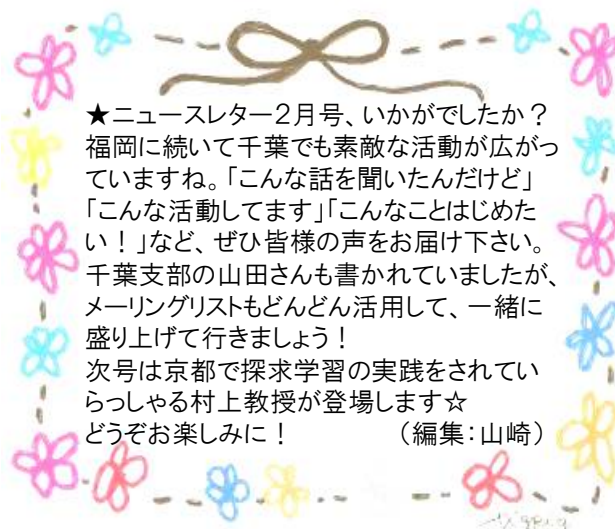
東京支部 info@japanjenaplan.org

千葉支部 chiba@japanjenaplan.org

埼玉支部 saitama@japanjenaplan.org

京都支部 kyoto@japanjenaplan.org

福岡支部 fukuoka@japanjenaplan.org



★ニュースレター2月号、いかがでしたか？
福岡に続いて千葉でも素敵な活動が広がっていますね。「こんな話を聞いたんだけど」「こんな活動してます」「こんなことはじめたい！」など、ぜひ皆様の声をお届け下さい。
千葉支部の山田さんも書かれていましたが、メーリングリストもどんどん活用して、一緒に盛り上げて行きましょう！
次号は京都で探求学習の実践をされているらっしゃる村上教授が登場します☆
どうぞお楽しみに！ (編集:山崎)